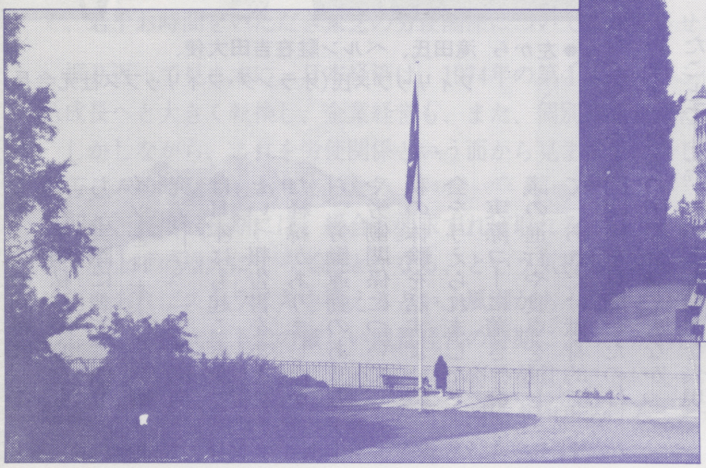
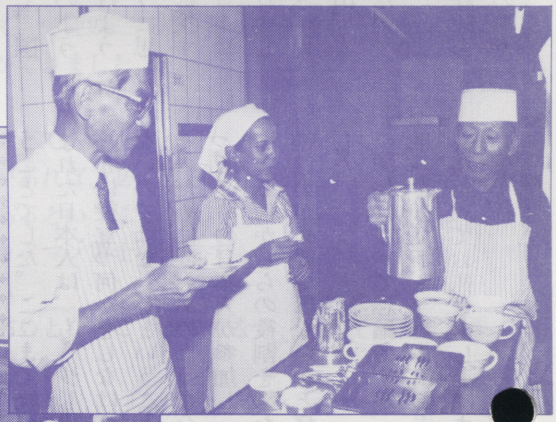
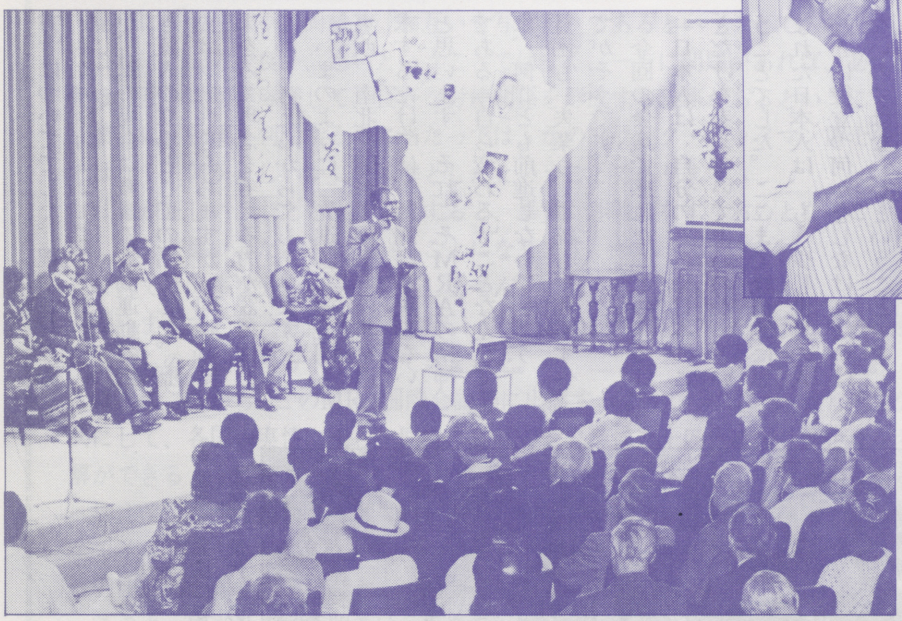
IMAJ ニュース
NO. 43
(社)国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和60年11月5日
発行所　(社)国際MRA日本協会
発行者　高瀬正二
TEL.03-821-3737(代)
頒価　1部200円
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

―緊迫した世界にともす希望の灯―





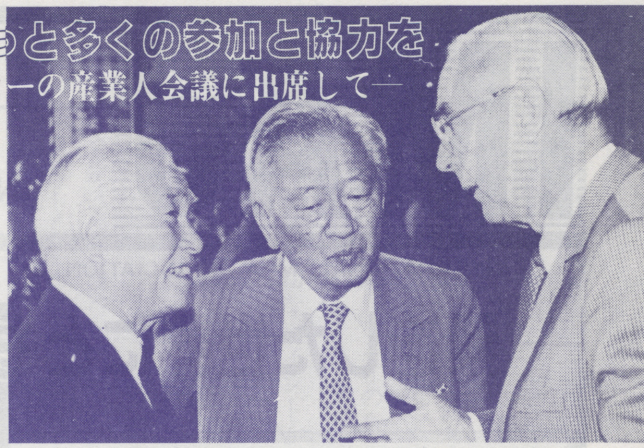


'85コーMRA大会（スイス）開催

本年度のコー世界大会（スイス）は、7月13日から9月1日まで開催されました。日本からは、アジアセッション（8/7～14）と、産業人会議（8/27～9/1）へ多くの方がたが参加され、なかにはジュネーブ駐在の千葉大使御夫妻、ベルン駐在の吉田大使、元経済企画庁長官の野田卯一氏、同盟顧問の滝田実氏、そして今年で9回目となった東芝労使代表団の姿もみられました。

もっと多くの参加と協力を
―コーの産業人会議に出席して―

同盟顧問
滝田　実



●左から　滝田氏、ベルン駐在吉田大使、
フィリップス氏（オランダ・フィリップス社元会長）

かねて相馬雪香さんから、幾度もスイスの産業人会議に行ってくれませんかと勧められ、コーの本部からも招待状を受けてはいたものの、いろいろ手がけている仕事がいくつかあったので、行くかどうかためらっていたのです。しかし出席して大変有意義でしたし、招待されたことを心から感謝しています。

ゲストスピーカーとしての私のテーマは、『先進国の症候群と労働運動』です。この問題は、ここ数年間私が関心をもち、実際に調査（西ドイツと日本の比較研究）もして、「先進国病は日本にも起こるか」という報告書をまとめた経緯がありましたから、労働運動のあり方や労働関係について、私の体験を話すよい機会を与えられました。

実際コーに着き、会議の進行や食卓を通じて、あれだけ献身的でなごやかな人間関係を見聞したのは、いままで幾多の国際会議でもなかったことでした。もっとも簡明な表現をすれば、清潔で、私心がなく、国境も人種も越えて一つの家族のように、真剣に新しい何かを見つけようとしている集まりであったように思います。しかも、自然の風景に接することが好きな私にとって、コーは最高の天候と条件を与えてくれました。夜明けの光、夕陽の美しさ、レマン湖を眼下にアルプスの連山、まさに一幅の絵画のように映ったのでした。

私のスピーチは、主として経験をもとに「労働運動と労働関係のあり方」についてでした。理論なら立派な学者がお話になればよいことですが、私の場合は戦後の労働運動の生き証人の立場としての話でした。歴史は継続性をもちますが、同時に結果をみて理念を考える方が説得性をもつと考えるからでもあります。

いまのように、先進国も途上国も、東西、南北を問わず相手方の非を追求するだけでは、問題は解決しないと思います。それこそMRAの精神である「自ら変わる」ことなくしては、何ごとも前進しないでしょう。貧困も、失業も、軍縮も平和もすべてがそうです。

今回の会議で感じたことの一つは、「日本人は、自分のことや日本のことだけを考えていてよいのか」ということでした。ここまで経済的に恵まれた日本人は、もう少し世界の人びとに役立つ何かをしなければいけないのではないかということです。そのためには、あのような会議にもっと多くの日本人が参加し、自分でできる何かしらの役割を果たすための協力が必要ではないかと痛感しました。

末尾になって恐縮ですが、私のお世話をして下さった藤田御夫妻に、あらためてお礼を申し上げます。

●産業人会議に参加された東芝労使代表の皆さん（前列）

東芝労使代表団 団長あいさつ

西岡　勝〈㈱東芝常務取締役〉

私ども東芝労使の代表団が、ここコーの地を訪れますのも早いもので今回で9回目となります。

この間、50名を上回る東芝労使の代表が、このマウンテンハウスに集い、世界各国の皆様と議論を交し、真の「相互理解」と「相互信頼」を深めることができました。

こうしたMRAにおける体験が、東芝の労使関係の発展にもたらしたものは測り知れないものがあり、この場をお借り致しまして、心から感謝の意を表する次第であります。

さて、本席には、東芝労使と既に交流のある方もいらっしゃいますが、初めての方々も多いかと思いますので、若干お時間をいただき東芝の労使関係についてご説明させていただきます。

振り返って見ますに、日本経済は、1974年の第1次オイルショックを契機として、それまでの高度成長から低成長へと大きく転換し、企業経営も、また、個別東芝企業にとっても、誠に厳しく苦しい時期を迎えました。

しかしながら、これを労使関係という面から見ますと、今日の安定したフェアな労使関係を築くための産みの苦しみの時期でもありました。

即ち、高度成長期には、組合も要求すれば取れる、一方、経営側も少しぐらい無理な賃上げでも高度成長、即、売上げの増大によって何とかなる、という気持ちもあって充分な話し合いもせず、それゆえに、労働組合は何かあればストライキを構えるという風潮があったことは否めません。

しかし、低成長下での厳しい減量経営の時期に入ってからは、労使は何事につけても話し合いを積み重ねることによって一致点を探し求めるという姿勢を貫くことによって、労使間に無駄な出血を避けるという認識が醸成され、その結果として安定した労使関係を作りあげることができました。

この時期に、私共が労使関係の基盤としたことは、

第1に「労使は車の両輪」、「お互いを写す鏡」であるということであります。

これは、一方が良い、悪いということではなく、一方に問題があれば、必ず他方にも問題がある。また、労使はお互いに切磋琢磨して、良好な労使関係を形成する義務があるということを意味するものであります。

第2に、物事を判断するのに当たっては、かのフランク・ブックマン博士の至言であります「誰が正しいかではなく、何が正しいか」を基準としたということであります。

「誰が正しいか」という議論をすると、畢竟、非難のなすりあいとなることが多くなり、それでは会社が悪い、組合が悪いとだけ言っていることになります。

これでは大事な労使関係は発展しません。

従いまして、東芝労使は、「何が正しいか」との観点に立つべく、あらゆる機会をとらえてお互いに視野を拡げ心からの共感を得るべく努めてきました。

以上のことから、このMRA国際会議等に出席するような場合にも、経営側と労働組合のリーダーとが行動を共にして、各国の実情に接し、同時に相互の意思疎通を十二分に図り、色々な考え方の中において、心から理解ができるように努力を重ね、これが一波万波を呼んで体制として現在のような形になったのであります。

加えて、日本では第2次世界大戦後あらゆる社会のメカニズムが崩壊し、特権階級や財閥等は全て解体され全てイコールとなったことから、階級はないのだという労使共通の認識の下に、労使対等、相互信頼を旨とする労使関係が確立できたと考えております。

このように当社の労使関係は、大変良好な状態にあると思いますし、この良好な労使関係をさらに深耕することこそ、今後の企業発展に結びつくものと確信している次第であります。

ところで、当社は、経営理念の1つに「東芝は世界企業を志向し国際的視野に立って企業経営を行う」ことを掲げておりますが、今回のわれわれ東芝労使の代表団は、このMRA国際産業人会議に先立ち、南米各国の当社の海外サイトや海外現地法人、さらには海外事務所を回り、遠く祖国を離れて海外で働いている仲間を訪問して参りました。

（次ページへ続く）

（前ページより）

お陰様で、これらの仲間は、文化・生活環境・習慣の違いを乗越えて、現地の人々の中に溶け込み元気に働いておりました。

そしてなんらかの形で現地の国のお役に立っておりましたことは、東芝の人間として誇らしくさえ感じた次第であります。

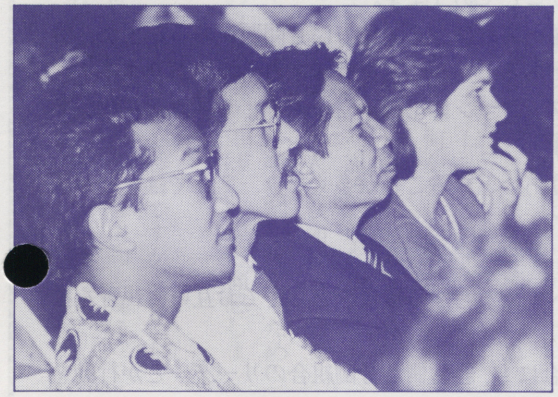
たとえ言葉が違い、肌の色が違い、風俗習慣が違ったとしても、お互いに相手を理解し、相手の立場に立って物事を考えるなら、真の協調はそれ程難しいものではないのではないでしょうか。

当社は、ただ今申し上げた南米諸国をはじめ世界各国で事業を展開しておりますが、この様な精神をさらに大切にしていかなければならないと、思いを新たにした次第であります。

私ども6名は、いずれも産業人会議への参加ははじめてでございますが、全員グループでの討議に積極的に参加し、私どもの持っております考え方なり、経験なりをご紹介する中で、皆様とともに論議を深めて参りたいと存じます。

コー大会スナップ

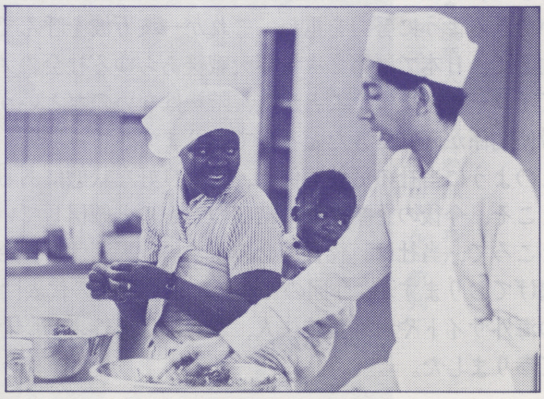
●アフリカセッションより



●真剣に聞きいるアジアの代表たち

●コロンビアからの参加者

●左はヨーロッパ経営大学院のジスカールデスタン氏（前仏大統領弟）



●仕事は分担で

◇住友義輝〈住友電気工業〉

自分が変わらない限り何も変わらない。自分が変わるためには、静かな時間をもって神の声を聞くことだとはわかっていても、日頃の生活では毎朝歯をみがくようにはうまくいきません。コーで神の声を聞くというのが私の願いでした。

ある朝、心の中で「自分のことしか考えていないのではないか」と誰かが言います。はじめはなんのことかわかりませんでした。しばらくしてハッと思いました。〝私たちはスイスを訪れたお客さまとして、本場のコーでMRAを要領よく体得して帰ることだけを考えているのではないか。何百人ものコーの人たちは、私たちをお客としてもてなしているのではない。世界のために一緒に考え、犠牲をはらい、責任をわかちあう仲間として、心を配ってくれている。それがコーなのだ〟ということに気がついたのです。

先進国といわれる日本ではありますが、世界のなかの自分の位置を見失うようなことになってはならないと思いました。

◇住友美子

「やるだけやっておかした間違いより、失敗を恐れてできなかったことによる間違いの方が大きいし、人の信仰をも妨げる」と、静かな時間をもったとき頭に浮かびました。

コーは新しい世界造りの希望にあふれています。人々の深い信仰、決意、周囲の人々への思いやりと率直さの中にいますと、数年来、私の頭に霧のようにかかっていた恐れと疑いは、傲慢（ごうまん）・自己中心・プライド・神の働きを妨げようとする自我の岩のような塊（かたまり）であったと気づきました。

コーでは、私の心の醜さが鏡に映るようにはっきりとみえます。信仰を増すということは、静かな時間に浮かんだ考えを、恐れることなく一つ一つ実行することによって与えられるものであり、決意の積み重ねが大切です。一人一人が、それぞれの段階で決意を重ねてこそ、今日のコーが存在します。

来年はコーの四十周年にあたります。次の四十年も、また私達一人ひとりが担い手となって、この灯を更に輝かせたいものです。

●壇上で話される住友御夫妻

◇尾崎敏郎〈レンゴー〉

〝今、自分で自分をチェンジするんです。世界の人がこんなに日本に注目しているときに、自分のことだけを考えていていいんですか？なぜ日本を少しでも世界の人に知ってもらおうと思わないんですか？今、決意をするんです。今チェンジするんです。さあ勇気を出して清水（きよみず）の舞台からとびおりるつもりで壇上にお立ちなさい。〟

否応なしの情熱あふれるS先生の言葉に、私のスピーチがやっとスタートしました。私は海軍での経験と、フランスのテートさんから教わった〝心の声を聞く〟ための実験を翌朝からはじめたことを話しました。（テートさんは、朝六時に起きてシャワーを浴び、ベッドの上に座って静かに心の声を聞いて、必ず紙に書きとめておくこと、このとき聖書でも仏典でも読むことをすすめてくれました）スピーチが終わるや、会場から善意で一杯の拍手がわきおこりました。次から次へと、多くの人が握手を求めてくるのです。この体験とS先生の強烈なはげましの言葉は、このたびのコーでの忘れられない出来事となりました。

◇山本達男〈住電資材加工センター〉

今年はじめてコーの会議に参加しました。世界各国から集まった五百人もの人達が、地位や貧富の差別もまったく無く、人権を尊重し、利害を越えて自由に語り合い、友達となっていました。どの部屋にも鍵というものがありません。まさにユートピアそのものの小さな国を見つけたという感じでした。

人間が変わるとき、不可能が可能になるという実態をこの目で確めることができたことは、私の今後の生き方に新しい目標と希望を与えてくれたように思います。

●日本人参加者によるコーラス

◇村山　清美〈㈲むらやま〉

花は美しくってあたりまえ、と今までは見ていましたが、こんなに美しいとは思いませんでした。コーに来て、心のゆとりがもてたのでしょうか。

花も人も本当に美しく、素晴らしいものは永遠に続いていただきたい、そして早くMRAへ寄与できるような自分になりたいと思いました。

コーでは心の声を聞くことの大切さをしみじみ感じさせられ、壇上で話もしました。あまりにも貪欲な自分自身に疲れ果て、数回の自殺も失敗に終わった私。しかし、今まで生きていて良かったなあーと思い、これからも神の声を聞き、最善を尽くし、世の為人の為に役立つ人間にならなければと、新たな決意をいたしました。

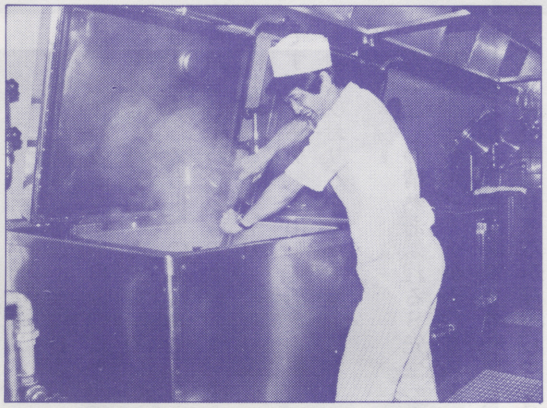
◇滝　佳将〈住友生命保険〉

世界大会参加の話があったとき、自分には関係ないことだと考えておりましたが、それからまもなく、「コーへ行け！体験せよ！」という心の声を聞き、参加を決意しました。

ユートピアと呼べるところへ、四つの絶対標準（正直・純潔・無私・愛）の実践者が世界中から集まっていました。私のくもった〝心の鏡〟は、その人々によりどんどん磨かれ、自分の現実の姿を映し出すのがはずかしくてたまりませんでした。

すると、静かな時間をもったときに次のような心の声が聞こえてきました。「感謝せよ、コーへ来れたことを。」「人の出会いに感謝できない人間は、自分を成長させてくれる人には出会えない。」それはまるで、仏典か聖書にでもでてくるような言葉なのです。これまでにまったくなかった体験です。

マウンテンハウスの周囲にひろがる景色、人々のあたたかい心、その環境のなかでは気負わなくとも自然にチェンジしつつある自分を感じました。



◇権田　祥子〈福岡市〉

「日本人は幸せだなあ。」と、心から思いました。

今、私がこの文章を書いている間にも、アフリカでは七千万人が栄養失調、そのうち多くが飢餓状態に追い込まれているということです。別の諸国では、戦争で多くの人々が次々と亡くなっているのです。このように人間らしい生活が送れていない、人間として必要な物が満たされていない国々が、たくさんあることを知りました。

人間の権利や尊厳が無視されているのです。私には想像もつかないことで、驚くと同時にとても腹立たしくなりました。平和な日本に感謝することも覚え、今までの自分本位の考えを恥ずかしく思いました。

それぞれの国にいろいろな過去があるとは思いますが、世界の人々はみな平等です。同等の権利や地位、自由が必要だと思います。平和な世界を築くために、世界に対する日本の役割を知ることが重要だと思います。それを理解し、同時に自分も変わっていくことが大切だと学びました。そのためには、日本の歴史や自分自身の過去をふりかえることも忘れてはいけません。

つまり四つの絶対標準（正直・純潔・無私・愛）にそって過去を見つめ直し、嘘やあやまちを正直に謝るということです。それによって新しい出発をした自分は、世界的な視野にたって、万人に愛情をもって接し、毎日自分自身が変わる努力をしていかなければならないと思いました。

◇小嶋麻美
〈浦和市立大久保中学校〉

私は全然英語が話せず、集団生活という経験もまったくありませんでしたから、不安もありましたが、とにかくクッキングチームにはいりました。

しかし、みなさんがとてもていねいに教えて下さり、ときには動作で表現してくれましたので、とてもありがたく思いました。

ところが私は、ロボットのように人に指図されながらでしか行動できなかったのです。このことを教えてくれたのも、まわりの人達でした。ある時、食事をしていると、「日本人は、自分で考えて行動することができない。」と言われました。その時、私はまるで自分のことを言われているような気がしました。すぐそのことを直そうと思いましたが、大変なことでした。自分の仕事が終わると、次にやるべきことを見つけなければならなかったからです。しかし、私にはとても良い経験になりました。

このようなことを、いろいろな人達にもわかってほしいと思います。

◇三浦　幸
〈大妻女子大学中野女子高校〉

一番感じたのは、自分が今までいかに無知であったかということです。他国の同[illegible]の人達がもっている考えと、本当に何も知らずに日本のことすら満足に答えられない自分とをくらべて、どうしようもなく自分が情けなく思えました。

根本からくつがえされたのは、外国に対する偏見です。これまで海外には出た経験がなかったからかもしれませんが、たとえば何の根拠もなく、日本人と外国人が同じ感じ方をしたり、意志が通じたりすることはないと思っていたのです。しかし、コーの人びとは、私の間違いだらけの英語でも理解しようとしてくださいましたし、私も辞書を持ち歩いて懸命に話すことによって、意志が通じ合うことができ、それに気づいてから人と話すのが楽しくなり、友達もできました。

受けとめることが多すぎて、自分から働きかけるまでには至りませんでしたが、私に考える機会を与えてくれた多くの人びと、そして出会う機会を与えてくれたMRAに心から感謝します。

◇嘉幡丈裕
〈東京大学〉

昨年夏、弟がコーの大会にお世話になり、感激して帰って来たのを見て、一度ヨーロッパ旅行をしてみたいという気持ちもあって、今年は僕が参加させていただきま[illegible]。

アジア・アフリカ・ヨーロッパセッションのみを狙い、しかし事実、国際関係の勉強といった真面目なテーマも持たずに、ただ外国人とじかに話したいという単純な気持ちでいたのですが、実際に生活してみて、その非常に独特な雰囲気に驚くことばかりでした。僕と同世代の青年が、僕より遙かに敬虔で高邁な心をもっているのに強く刺激されました。何百人という出席者が、一つの理想の為にこれほど見事に協調する姿は、とても感動的でした。今日の国際社会において、こうした協調がなぜ起こり得ないかを探ることは、次代を担う我われ若者のテーマだと僕は考えます。

ところで、神ということがしきりと話題にのぼりました。信仰を持たない僕は、その度に少さくなって謹聴していたものですが、ある晩餐の席で、イギリスの退役将校が、テーブルの中心にある水さしを示してこうおっしゃいました。即ち、これが神である。神は一人しかいない。ただ、各人がそれを見、求める角度が違うから幾通りもの呼び名があるだけで、無信仰の人にとって、それは良心と呼びうるものかもしれない。けれど皆が求めるものは一つである。

――確かにそう言われれば分かる気もします。しかし振り返って自分の良心というものを考えるとき、それを神と呼ぶには余りに脆いという事を思わずにはいられません。その意味で、信仰をもたない事は大きな不幸なのかもしれません。

多くの人が、コーへ〝充電しに〟来ると言いました。僕もまたこのスイスの地で、普段忘れていた多くの希望や勇気を教えられたような気がします。これらは、霞に浮かぶ黎明のレマン湖や、山麓の乾いた涼風と共に、美しい思い出として一生心に残ることと思います。

●マレー系・中国系・インド系がそろい人種間の調和を印象づけたマレーシア代表団

日本スイス青少年交流使節団

関西日本スイス協会と大阪市教育委員会の協催により、スイスに二十五日間派遣された青少年交流使節団の中学生が、昨年にひきつづき、7/31～8/3までコーの世界大会に参加してくれました。

村崎　直子
（大阪市立歌島中学校）

心が洗われるような美しい自然に囲まれた会議場、マウンテンハウスでは、私達も、食事の時には積極的に挨拶をかわしたり、お互いの国の話をして、その結果いろいろな国のことを知ることができました。また、一度は男子がサービング（食事のサービス）、女子はクッキングのチームに参加して、〝人のために働いた〟、〝言葉は通じなくても立派に仕事を成し遂げた〟という喜びを味わいました。

大人も子供も一緒に集まって楽しんだミーティングは、最も強く印象に残りました。この暖かい雰囲気に包まれていると、いつのまにか私達の間に国境はなくなっていました。

そして、今まで井の中のかわずだった自分達に初めて気がつきました。

MRAは、私達に平和や友情について教えてくれ、また心の清らかさをも取り戻してくれました。MRAの精神は、平和へ続く一本の道だと思っています。そして私達は、この道をこれからもずっと、後退することなく歩き続けていかなければなりません。

私達はこの四日間、本当に楽しく有意義に過ごすことができました。多くのみなさんのお世話があったからこそです。本当にありがとうございました。

（前列左から）
- 松虫中学校　玉串　吉彦君
- 長吉西中学校　西村　直君
- 梅香中学校　宮下　充弘君

（後列一人おいて）
- 歌島中学校　村崎直子さん
- 新生野中学校　篠本裕子さん
- 上町中学校　浅野尚未さん

●〝サービスされる側にまわるのも悪くない〟（右は、韓国代表）

●ファミリーセッションでの一場面

コーおぼえ書き

※「丈夫なもののみが生き残る」――これは、一番大きい筋肉と歯の持ち主をいうのでしょうか？ずいぶん昔に恐竜が死に絶え、アリが生き残っているのを考えると、この説はウソのようです。丈夫な、健康なものとは、まわりと協調していけるものをさすのです。

（カナダの内科医）

※幸福と同様に、健康もまた、私たちの生き方の副産物として与えられるものだと思います。

（スコットランドの医師）

※みな「私はだれも憎んだことはない」と言いますが、人に対する思いやりももたずにきました。私たち白人の『無関心』が、『憎しみ』を増長させたといえるでしょう。うまれてくる場所は選べませんでしたが、自分の生き方は、自らで選択していくつもりです。

（人種政策でゆれる南アフリカ出身の女性）

It's worth thinking over ——
考えてみる価値があります。——

Am I part of the cure or part of the disease in the world?
私は世界の“病(やまい)”の片棒をかついでいないかな。
それとも、それをいやす側にいるかしら。

Remember —— you can't make a good omelette out of bad eggs.
覚えておいて下さい。——
腐った卵で良いオムレツを作るわけにはいきませんから。

MRA国際会議のご案内

国	インド	オーストラリア
テーマ	『第6回開発のための対話』	『ジュンガイ—原住民アボリジニーの言葉で「集まって楽しみながら、新しい人の輪をつくっていこう」の意』
日にち	昭和61年1月4日〜11日	昭和60年12月29日〜昭和61年1月4日
場所	Panchigani（ボンベイから248km）	Harrietville Alpine Lodge（メルボルン近郊）
お知らせ	●チベットのダライ・ラマ猊下(げいか)が開会を宣言される予定です	●年齢制限なし（家族ぐるみの参加歓迎） ●大自然の中でおもいきり体を動かすための設備あり

※詳しくは、事務局へお問いあわせ下さい。

私の心をささえた油絵

陽光学院々長
父親・母親講座講師　山崎　房一

今から二十八年ばかりのことです。私はウイルソン家にお世話になってから、毎日毎日、ロンドンのMRAハウス45の地下室へお皿洗いに行きました。

湯気と汗で目は真赤に充血し、まぶたがはれるのです。手は白くふやけてしわだらけ。もちろん、便利な皿洗機などありません。困ったのはガラス食器です。特に細長い足のコップ類は、慎重の上にも慎重に全神経を使って洗わないと、ポッコと軽い音がして、こわれてしまいます。一人前の皿洗いになるまでには、私もたくさんコップをこわしました。

やっと洗い終わって、ほっとひと息つくまもなく、次の汚れた食器がドッと運ばれてきました。次から次へと、もうウンザリするほど…

洗い終わると、いつも夜中の十二時を過ぎていました。この皿洗いチームは、戸叶勝朗(とがのかつお)さん、オーストラリアのジョン・ブライアンさん、そして私の三人です。今、彼はオーストラリアで有名な医者だそうです。

両親へ出したいロンドンの絵葉書を買う金も、バスにのるお金もないので、このウォッシングチームはあちらこちらをよく歩きました。

来る日も来る日もお皿洗いばかり。私はそれをよろこんでやっていたわけではありません。一度でいいから、大きなテーブルの末席にでも座ってみたい。そんな気持ちも起きたのです。

迷いや不安でゆれ動く私の心を慰め、支えたのは、一枚の油絵でした。それは地下の皿洗い場から一階へ、そして二階へと上がる階段のところにかけてあったと思います。それには、椅子に座っている五人の人々の足を、キリストがひざまずいて洗っている姿が描かれてありました。

今その油絵は、たしかスイス、コーにあるマウンテンハウスの小食堂に通じるロビーの、グランドピアノの側にかけてあるはずです。私の心の中にいつもこの絵をかけておかないと、身近な人の気持ちをガラスのコップのように、自分では気づかずに傷つけ、こわしてしまうのです。

今思うと、ロンドンでお金が無かったこと、きつい皿洗いをやったことは、私の心洗いだったのかもしれません。数年前、コーへ行ってその絵に対面したとき、私の気持ちがほっとやすまる思いがしました。

「神の声をきく」というとなにか親しめない人は、「心の声をきく」ということでいいのです。

MRAはむずかしいことは何も言いません。ただ日常生活の中で、「心の声をきく」習慣を育てていこうというのです。むずかしい学問もいりません。「三才の童子もこれを解す」と、昔の人が言ったということを耳にしましたが、まさにその通りで、その声に従うかどうかに大切なポイントがあるのです。

三才になる子供が、チョコレートを箱から出して一人でムシャムシャ食べているのを見つけた父親が、「お母さんにきいたの？」というと、「ウーン、でも神様にきいたよ。」との答。「神様いいって言った？」と父親。「ウン」と答えた子供は間がわるそうに、「本当はいけないって言ったんだけど、ボク、神様と話し合ったら、いいって言ってくれたんだ。」そこで父親はいいました。「神様の言うことをボクがきくのであって、ボクのしたいことを神様におしつけちゃだめだよ。」

これは、毎朝静かな時間をもって神にきくことを習慣にしている、ある親子の会話です。この話を聞いた時、子供のありのままの正直さが、私の心に深くささってきました。私も何度、神様に談判して「でも、そう言うけれど、そんなことはできませんよ。だいいち、常識に反するし…でもぜひと言われるなら、この程度にまけていただけませんか？」などなど、心の中で話し合いを続けていることかと恥ずかしい思いがしました。

いきなり大きなことをやろうと言うのではなく、身のまわりから始めることが何より大切なようです。心につかえていていつも気になっていること、これなどは、私どもが求める以前から神が働きかけている証拠ではないでしょうか。

「でも」というつっかえ棒をとって思いきってやってみることです。「日日日日に、つもる心の塵あくた、洗い流して我を訪ねん」（二宮尊徳）――生きがいを見い出す最良の道です。

心に残ることば

♬ぼくらには
友だちの話をきくために　2つの耳がある
（I have two ears, yes, I do, to listen to my friend）
光を求めていくために　2つの目がある
（I've two eyes, to search for the light）
パンをわけてあげるために　2本の手がある
（I've two hands to share bread with）
明日にむかって歩くために　2本の足がある
（I've two feet to walk towards tomorrow）
まわりの人に与えるために　心がある
（I've a heart to give to those around me）
歌をうたうために　心がある♬
（I've a heart to sing my song）

（コーのファミリーセッション中につくられた歌'Action Song'より）

●事務局近況●

●四月から事務局で働いて下さっていた北口尚子さん（二十一才）は、七月中旬に出発され、コーでの大奮闘ののち、現在イギリスのMRAセンターで活躍中。優秀な人材の輸出ならむしろ摩擦解消につながるハズと、彼女は期待されること大！

●兼松恵さんは、しばらく関西にベースをおくことになり、東京の事務局は、関西地区のMRA活動推進のためと涙ながらに彼女を送り出しました。ハウスでも事務所でも、お手伝いして下さる方は大歓迎です。いつでもとびこんできて下さい。

●次号では、10月12・13日に開催された第八回関西秋季大会の報告をさせていただきます。